

第十回教化化学研究集会研究発表要旨

草山集「智慧粥の詩」を拝読して

その復古を提唱する

清 水 学 勵

(京都府実泉院住職)

『草山集』(三二七頁)に「智慧粥の詩に和す並引」と題して、次のことが記してある。

元政上人の母上妙種尼に仕えていた妙恰の子に、「虎」という少年がいた。毎日の僧院の生活を見て、自分も坊さんになりたいものと一切葷腥(なまぐさ)を口にしない。妙種尼がその真面目さに心を打たれて彼の出家(七歳)を許すと、虎は大喜びで上人の下へ来て、出家の名を下さいと願ったので、上人は俗名に因んで「虎哉」と名付けられた。喜び勇んだこの子は、毎日熱心に法華經の音読を練習して、遂に一部八巻を通読することが出来

た。九歳の時である。

当時は、小僧が法華經一部を通読すると、赤豆粥を煮てお祝をする習慣があった。妙種尼は早速粥を煮た。みんなで祝っている時、たまたま花園の東黙(妙心寺太嶽禪師)が来合せて賀詞を作れば、元政上人も即座にこれに和して七言絶を作られた。

甘露粥成つて一盃みに盈つ嘗め来つて便ち識る是れ醍醐なることを、千二百の舌の功德を得ば辛苦醎酸ついに殊ならず

(甘露のように美味しいこの一碗の粥こそ、まさに醍醐味というべきである。それも当然であろう。今祝っているこの子は、法華經を通読し得たのであるから。法師功德品には、法華經受持の功德として六根清浄が示してあり、その中の千二百の舌の功德、すなわち、舌根浄を得ることによって、辛さも、苦さも、醎(しおからさ)も、酸っぱさも、すべて同

一上乘の甘味として味わわれる。実に有難いことである。)

これによると「智慧粥」とは、発心の小僧が法華經の音読を習い終った時、その子の不退転の成満をみんなで祝つてやる赤豆粥のことで、その粥に「智慧」の二字を冠させたのは、おそらく、法華經通読の功德によつて、自然に仏智慧を感得することを意味しているのではないかと思う。

法華經を通読したとは言え、子供のことである。人智としては、何と言つてもまだまだ稚い。未熟である。しかし、平等大慧の法華經を通読し終つた今では、稚拙な人智の上に、既に無量の仏智が輝いているから、未熟のまままで悲智円満の本仏の懐にだかれてゐるはずである。

「無量義經」十功德品の第四に、「仏と經によつて菩薩のみ子を生む」とあるが、この新発意の菩薩のみ子は、大悲の光輪に包まれ、如我等無異の仏子として、これから多難な人世へ出発するのである。

智慧粥とは、この菩薩童子の栄ある前途を祝福するための大王膳なのである。

もし、現在の寺でこれを祝うとすれば、諸事贅沢になつてゐるから、さしづめ料理をとるか、厚いテキでもつつくか、中華料理でもバクツクところであろう。

當時でも、在家での祝事であれば、おそらく赤飯にお頭付といふところであろうが、それを赤豆粥としたところに、当時の僧院の簡素な風習が偲ばれて実にゆかしい。

この智慧粥の風習が、いつ頃から起つたのか、又いつ頃まで続けられていたのか、寡聞にして私は知らない。師匠からも先輩からも知らされていないから、明治の中期には既に途絶えていたに違いない。

元政上人は、「凡そ我が俗、法華全部を終うる日、必ず赤豆粥を煮て之を祝す。名けて智慧粥と曰う」と言つておられるから、當時は当然の風習として行われていたようであるが、それが、宗門全般にわたつてのことか、又は地理的に深草周辺の俗習によるものか、或は同じ法華読誦の先輩天台宗から出たものであるのか、今は皆目分らない。無論、こうしたせんさくも亦結構であるが、それよりも、このよき風習を是非復活させたいものだと私は願つてゐるのである。

近頃は法華經一部の通読者が少なくなつた。私の小僧時代には、まだ法脈師資相承が生きていたから、いわゆる師敵道尊で、弟子は師匠の薰陶を慈愛として素直に受入れていたから、一部通読などはホンの序の口で、比較的直面目に僧儀に従つていた。が、今は違ふ。どの宗派も大体浄土真宗を真似て、血脈父子相承が当然視されてゐる。だから親も甘いし、子も、それを見越して弟子とは名ばかりで、一般家庭の子としての立場を主張する。師弟というよりも親子関係が先に立つから、甘えるというより我俗を通す。更に母親の甘さがこれを助長して、師父の立場を陰に牽制する。

もとより師匠と弟子とは、私生活において、余りにも接近し過ぎてゐるから、師敵は既に初めから半減されてゐる。厳肅な部経習得の場が、次第に遠のくのも無理はない。

信者の方にしても、世相一般の気ぜわしさから、ゆつくりと読経を拝聴する者も無くなつて、時たまの法事で、足のしびれを氣にして短かく簡單なのを喜ぶ。「有難いサワリをチョット」などと下手な浄瑠璃を聞かされる

ように、初めから逃げ腰になつてゐる（ただし、自己の願望を充たしてもらつたための祈禱経は、また別である）。勢い、僧侶は特定の地方を除けば、部経を読めなくとも、決して不自由はしない。要品までいかなくとも、三品経に、観音偈と陀羅尼呪で結構事足りる。そうなれば、何も苦勞して長年かかつて一部経を習ふ必要もあるまい、ということになる。

たとえ需要は無くとも、宗祖の弟子である以上、自行として部経の通読ぐらゐは当然のことであるが、そんなことは、今では問題にされない。要は、日蓮宗徒たるの自覚や義務などはどうでもいい。ただ日常の生活が潤えば、それでいいというわけになる。

こう言つたからとて、私は部経の多読主義者になれど、決して言つてゐるのではない。寧ろ、多読のために早口に読むよりも、いわゆる音吐適亮おんじゆつりやうに文句分明なることを願つてゐる。更に言えば、真読よりも訓読によつて、心静かに自己の魂と交流するような読み方であつてほしいと願つてゐる者である。

私は、誦経の功德が仏天への最上の法味であり、幽明

共に歡喜するものであることも、先師の遺教によってよく知るところであるが、本来誦經の功德は、何と云つても、自己の内奥と感応するものでなければならぬし、それこそ眞の仏祖への法味言上となるものであると確信している。

もし、この記によつて智慧粥の復古に御賛同の士があるとしても、一部通読者が現われなければ意味をなさない。新發意に望めないとすれば、この復古は実現せぬことになる。

そこで、私は提言したい。

新發意のかわりに、我々がこれをしたらいいのではないかと。我々がもう一度初心にかへつて智慧粥を祝う。すなわち、新發意に対して、我々が身を以て示すのである。「馬鹿にするな、今更そんなことが出来るか、この年になつて」と、或はおつしやる方もあろうが、そこをまげてお願いするのである。

元政上人の会下では、虎少年が「常に僧儀を觀て之を慕う」程に嚴正な律儀が保たれていたが、不徳の我々では、童子に慕われる程の僧儀は、望みうべくもない。け

れども、同じ宗祖の末弟として、己の不徳を懺悔するぐらしいの微かな良心は残つていてもいいと思う。その懺悔の現われとして、もう一度智慧粥を祝つたらどうか、と私は言うのである。因に虎少年は後の草山三代慈觀和尚である（『本化別頭仏祖統紀』四八七頁、並に『草山集』二七三・三二七・五五七頁参照）。

物事には、すべて初中後があるように、法華經通読にも初中後がある。初めに新發意の時に音説で終了したから、それで能事足れりと、すましていいものではない。僧侶である以上、習得したお經の切り売りだけで世を過すのは、余りにも勿体なさ過ぎる。それを今一歩進めて、訓読によつてその經旨を知り、更にその内奥に入つて自利利他円満の境地を得なければならぬ。ここに初めて智慧粥の眞意義が発揮されるのである。私が提唱するのは、ここまできてほしいということなのである。

少なくとも宗祖の弟子と名乗る以上、「日蓮一人これを読めり」に続いて、「某一人これを読めり」までいかにくは嘘である。「私一人これを読めり」ということは、この智慧粥を醍醐味として味わうことである。そのために

は、我々は終生の努力を要する。能事足れりとおさまり返る時は我々にはない。昼夜常精進であり、是則勇猛、是則精進である。

要するに、中、後の智慧粥は、お経の文字を追うのみの通読ではなく、文字を通して心の琴線に触れた当処を読経の真骨頂としなければならぬ。口業の通読から、意業に進み、感応道交して自然に身業に現われるのを智慧粥の最上乘とする。「身口意三業のお題目」という言葉は、誠に所以ある哉である。

我々は最爲第一の法華経を持っている。日本第一の法華経の行者日蓮の弟子である。この自負は、まことに結構であるが、それは懺悔の心をその根底に持っていてこそ成長するもので、内省のない自負は、往々にして我々を増上慢にする枷になりがちである。

方便品には「如我等無異」とある。だから、ただお題目を唱えていればいい。ただ法華経を誦していればいい。それで仏様と同等だと思っている。正にその通りに違いない。しかし、その「ただ」が、単なる「ただ」でないことに我々は気付かねばならぬ。この「ただ」に来るま

では、どれほどの血みどろの修行を要するものか。不借身命の後に、初めて「ただ」の境地に到達し得ることに、我々は心して再認識しなければならぬ。

然るに我々は、悪いことに（本当は善いことのだが）初めから最上の法華経を頭に頂いている。そして他の事には、随分疑い深い人種であるくせに、この信仰の一大事になると、自分に都合よく、素直に、上ツ面の「ただ」を鵜呑みにしてしまう。此の点、まことに従順である。

ところが、これがそつくりそのまま増上慢につながってくる。丁度、金持の息子が自分の無能に気付かず先祖の財宝を入れてある蔵の前で威張っているようなものである。威張ってはいるが、その蔵の中にどれ程の財宝があるかは、開けたことがないから知らない。知らぬまま、知らないが故に、宝の活用も出来ぬまま、ただ宝があるぞと人に誇示している。それ故、自分はあつさりとか我等無異になり上つて、その立場から他宗を眼下に見下して、「権門の輩」と十把一からげに片付けてしまう。自分の知らぬ間に「権門の輩」なるものが、どれ程蔵の中の宝を有効に用いているかを知ろうともしないで

……
荒村 食を乞い了つて

帰り来る 緑岩の辺り

夕日 西峰に隠れ

淡月 前川を照らす

足を洗つて 石上に上り

香を焚いて 此に禪に安んず

我も亦 僧伽子

豈 空しく 涼年を渡らんや

これは越後の良寛の詩である。托鉢の後に、焚香たんこう安禪あんぜんする彼の真摯な相がよく伺える。

子供を相手に毬をつき、はじきをし、かくれんぼうをしている良寛と、僧としての自覚の下に真面目に自己を見つめて冥坐する良寛とは、決して別人ではない。「我亦僧伽子豈空渡涼年」わしも坊主だ、どうして安閑としていられるか。

この言葉こそ、他山の石として素直に受入れていきたいものである。

自坊の縁起

中 井 泰 淳
(兵庫県本泉寺住職)

本泉寺を読みかえて、通称「もといずみ」の名を定着させていたのだきたいものと思つております。

おそらくこの寺号は、法師品の「高原鑿水の譬喩」から命名されたものと存じます。

世親の『法華論』には、(イ)究尽すべからざるものは、小乗の泥濁の水から出離している。或は、(ロ)蓮華が泥水より出ずるが如く、二乗も法華経を聞いて仏となることができる。すなわち、前者は法について、後者は人についての出水の義が積されてあります。

何しろ酒どころ神戸の灘でございます。酒の出来映えの好し悪しは、湧水の如何にかかつております。この意味にかこつけて、「もといずみ」の呼称を希望いたします。

標題からは、由緒ある寺院の縁起かと、お間違いないるむきもあるかと存じますので、前もつておことわりいたしておきます。